
ライバル OR

ウッチー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライバル OR・・・

【Nコード】

N2389Y

【作者名】

ウッチー

【あらすじ】

拓也は空手歴11年

拓也には宿命のライバルがいる

だが拓也は宿命のライバルである桜に恋心を抱いて？

一期一会

プロローグ

一期一会

一生に一度しかない出会い

もし君がいなかったら
今のオレはないだろう

今ほど強くなっではいなかっただろう

空手をやめてたかもしれない

弱いままの情けない男
で終わっていたかもしれない

オレはあの日からずっと
心にしまっている言葉が
ある

ありがとう

たったこの5文字が伝えられない

それどころか
まともに話したことすら
ない

この気持ちを伝えたい
宿命のライバルである
君に

そして
好きな人である
君に

分かってる

オレと君は戦う運命にあるって

この感情は邪魔になる

でも
伝えたい
この気持ち・・・

第一話

主人公紹介

みなさんこんにちは

この話の主人公

うちだ
内田 たくや
拓也

です

よろしくお願いします？

みんなからはウッチー

もしくはたあー君

と呼ばれてる

オレは中学3年で

4歳から空手を続けて来ている

オレの通っている道場は

くさつ
草津支部

という道場で

最近、力をつけてきているダークホース的な存在である

この物語は

オレ拓也と

そのライバルの

むらもと
村元 ひん
桜の話である

ここで気づいた人もいるかと思うが
桜は女である

なぜ女がライバルなのか？そう思う人もいるだろう

それはこれからの話すのでお付き合い願いたい
(つまらないかもしれないが)
出来れば見て頂きたい

第二話

草津支部誕生

どうもこんにちは？？
拓也です

読者の皆さんに
オレと桜の関係について
知ってもらうために

過去の話になります
退屈かもしれませんが
お付き合いお願いします

11年前

オレはいつものように
草津幼稚園で友達の

堀^{ほり} 良^{りょう}君

田^{たなか}仲 健^{けんた}汰^た君

栗^{くりはら}原 大^{たいき}器^き君

沢^{さわだ}田 翔^{しょうき}貴^き君

達と話をしていた

拓^{たく}也^や「ねえねえ、りょう

、けんちゃん、

今日は何して遊ぶ？

くん、たいちゃん

しょうくん

(＊＼／＼)

良「ぼくはサッカーが

いいな」

健^{けん}汰^た「ぼくは野球」

大^{だい}器^き「折り紙？」

翔貴 「本が読みたい？」

拓也 「またみんなばらば

ら？ じゃあ

じゃんけん？？？

できめよう」

全員 「じゃんけん・・

？ 「おいみんな」

拓也 「どうしたのひろくん

？」

彼は藤田^{ふじた} 寛^{ひろ}彼もまたオレの友達

寛 「何か知らないおにい

ちゃんが来てるよ

なんか白いふくに

黒いベルトつけてる

人」

健汰 「みんなで行って

みよう」

全員 「うん」

そしてみんなで行って見ると白い服の若い青年が先生と話していた

大器「先生このおにいちゃ

んだれ？」

先生「このおにいちゃん

はみんなに空手を

教えにきた

じんぐう
神宮

先生よ」

神宮「こんにちは？」

みんないつしよに

空手しよう」

良「おもしろいの？」

神宮「おもしろいさ

2階においで」

全員「うん　いくいく？」

そして2階にいくと

1つ上の

やました あや
山下綾

と同じクラスの

まつた かなな
松田 神無もいた

そしてオレたちは先生と

空手をした

オレはなにが楽しいのかわからなかったが

みんなは楽しんでいて

気がついたらお母さんたちが向かえにきていた

拓也以外の全員が

空手を習いたいと声をそろえて言っていた

母「たあーくんはどうする

の？」

拓也「ぼくは……

）どうしようかな

おもしろいくなか

ったしなあゝ

でもあの服かつこ

いいし）

お母さん僕もやる」

こうして草津支部が
結成された

第二話（後書き）

上手くかけなくてすみません

第三話

第三話 昇級

拓也達が空手を始めて半年がすぎた

拓也達の頑張りを認めた
神宮は昇級試験を受けさせた
そして

拓也「ぼく、受かったかな

？」

健汰「大丈夫でしょ」

大器「まあぼくは合格間違

えなしかな？」

翔貴「たいちゃんはいいな

じしんがあって」

寛「ぼくも不安だ？」

良「ぼくも」

拓也「りょう君は上手いか

大丈夫でしょ」

全員「そうだね」

神無「先生きたよ」

神宮「おめでとうみんな

今日からみんな黄色

帯だよ」

全員「やった??」

健汰&大器「黒じゃない」

神宮「黒になるには

白↓黄↓緑↓紫

茶色↓黒という順番
なんだよ」

に合格しなきゃだめ

健汰&大器「はい」

神宮「みんなの新しい仲間

を紹介するよ」

井田^{いだ} 準^{じゅん}君だよろしくな

準「みんなよろしく??
りたいな」

僕もはやく黄色帯にな

全員「よろしく」

神宮「みんなそろそろ試合
思っている」

にでてもらおうと

健汰「試合って相手をたお

したらかちなの？」

神宮「今みんながならって

る型を

4人の審判にみせて

上手なほうの勝ち

だ
よ」

大器「相手は男だよね？」

神宮「型だから女もいつし

よだよ」

大器「わかった」

神宮「みんな頑張ろうな」

全員「はい」

こうして

みんなのデビュー戦が
始まるうとしている

この時拓也は知らなかったこの大会が拓也の人生を大きく変えるこ
とになるとは

そして

アイツと出会うとは

第三話（後書き）

毎度毎度下手な終わり方ですみません????

次は宿命のライバルである桜との出会いです

第四話

第四話 デビュー戦&出会い

3月

それは毎年空手の試合が行われる月である

その名を

少年大会？

（普通すぎる？）

この試合の結果次第では
県大会、全国大会にでられるのだ

拓也、良、寛、翔貴
「どきどきするな」

大器&健汰

「まあ優勝はぼくかな」

綾「ハハハ？」

神無「優勝できるとしたら
んでしょ」

りょう君かあやちや

良「僕には無理だよ」

あや「わたしも」

拓也「二人はうちのエース

だよ」

寛&翔貴「だよね」

健汰&大器「エースはぼく

だよ」

健汰と大器以外は良と綾をエースとして認めていた
空手を始めて11ヶ月

当然それだけたてば実力にも差が出てくる
頭角をあらわしたのが良と綾だった

今では頭二つぶんぐらい
とびてている

まあ本人たちには自覚がないのだが？

そして試合が始まった

健汰、綾、良はAブロック

翔貴、寛、神無、大器はBブロック

拓也はCブロック

拓也「ぼくひとりだよ？」

試合はAブロックから始まった

期待の良と綾はその実力を発揮しデビュー戦で
ベスト16に入った

健汰は三回戦まで

初出場ということを考えれば上出来だろう

続いてBブロックでは

寛、翔貴、神無が二回戦までいった

本人たちも初勝利に喜んでいた

大器はというと

持ち前の負けん気の強さと自分への自信で
四回戦までいった

初出場ではすごすぎるでしたが、

本人は不満そうだった

拓也「みんなすごいなあ」

良「たあーくんなら大丈夫

だよ」

健汰&大器

「まあ僕より上はむりだろ

うけどがんばって」

翔貴&寛「ファイト」

神無「がんばって」

綾「応援席でみてるね」

拓也「ありがとうみんな」そういつて拓也は試合に向かった

副審「それではこれより

一回戦を始めます」

「赤、内君」

拓也「は、はい」

審判「お互い礼、はじめ」

拓也「え？なにになに あれ

はじまつてる

えーと？ えーと？

どうすれば」

初めての試合

みんなは勝ったのに自分だけ負けられない
そういった目には見えないプレッシャーが拓也をおそう

拓也は人一倍緊張しやすい不運なことに
声をかけてくれる仲間が
Cブロックにはいない
拓也の頭の中は真っ白に
なった

そして気づいたときには

副審「判定」

4人の審判がバサツと旗を上げる

副審「白4、赤0で白の勝

ち
礼」

相手「ありがとうございま

した」

拓也はとりあえず列に戻った
そして拓也は自分が負けたことを理解した

拓也「負けた。ぼくは負け
みんな一回は勝った

た。もう次はない
のに」

いつの間にか拓也は大粒の涙をこぼしていた

A「うわ、こいつ泣いてる

よ」

B「だっさ やーい泣き虫」

拓也は何も言わなかった
怒ることすらできなかった

拓也「やめてやる 空手な

なんて大嫌いだ」

拓也が空手をやめる決意をしようとした時だった

？「泣かないで」

そういつて慰めてくれた

？「くやしいよね わたし

もくやしくて一生懸命

練習したんだ

私の名前はさくら

よろしくね

じゃあ私の番だから

行ってくるね」

そういつて桜はいった

気づいたときには泣き止んでずっと桜をみていた

そして

拓也「きれい」

ずっとそうつぶやいていた

今でも忘れられない

11年 たった今でもしっかりと

脳裏に焼き付いている

例えるなら

彼女は「蝶」

「蝶のように舞い蜂のようにさす」

時にきれいで時に力強い

彼女の型はまさしくそれだとそう思った

そして拓也はそのとき

「かつこいい？ ぼくも

あんなふうになりたい」

結局、その試合は桜が優勝した

拓也「さくらちゃんか」

この時拓也はさくらにものすごい憧れをいただいていた
そして空手を頑張ろうと
決意した

第五話

第五話 試合再び

試合が終わって一時間がたとうとしていた
拓也は車の中で考え事をしていた

拓也「結局、あのあとさく
かったな？ 僕の名前
ありがとうっていい
らちゃんとは話せな
教えてないよ？
たかったのに」

父「そういえばさつき誰と
話してたんだ？」

拓也「さくらちゃん
名字は知らない」

母「ちよつと待ってねええ
あったあった
むらもと さくら
と確かプログラムに
ちゃんね」

父「女なんかになぐさめら

れて情けないぞ」

拓也「うるさい？」

父「帰ったら練習だ」

母「今日は疲れてるんだか

ら休ませてあげて」

父「冗談にきまつてるじゃ

ないか？

にしても拓也

かわいい子だったな

惚れたか？」

拓也「そんなことないにき

まってるじゃん」

この時はただの憧れとしか思ってた

そしてその後の練習から

拓也は目の色を変えて練習した

神宮「いいぞ拓也」

拓也「先生ぼくがんばる」

そして月日は流れ一年がすぎた

草津支部も人数が増えて

15人になった

ただ、変わったことがあるとしたら寛と翔貴が親の都合で引っ越したことだった

準「初めての試合で緊張す

るよ」

良「落ち着いてすれば大丈夫から」

夫だよじゅん君上手い

拓也「ぼくも緊張しちるけ

どがんばろう」

準「うん」

健汰「今年はりよう君が優

勝かな」

大器「かもね」

自分達の力に自信を持っていた大器&健汰までもが
良の力を認めていた

それくらい良の力はすごかった

今年は

神無、大器、良、準が
Aブロック

健汰と拓也がBブロックだった

綾は小学一年生の部で
ベスト16に入った

神無「やっぱあやちゃんす

「こいや」

綾「ありがとう 神無も

がんばって」

Aブロックでは

神無、大器、準が二回戦までいった

準は初勝利を喜んでいたが大器は納得いかないようだ

そして我らがエース良は順調に勝ち進みベスト16までいっていた
後一つ勝てばベスト8
そしてその相手は

桜であった

拓也「りよう君とさくらち
手いんだろ」

やんってどっちが上

拓也は興味津々だった
良は白、桜は赤だった
そして

副審「判定赤4、白0で赤の

勝ち 礼」

良&桜「ありがとうござい

ました」

拓也「さくらちゃんって

やっぱりすごい
あのりよう君に
つな なんて」

ストレートで勝

拓也「よし今度は僕の番
とる」

だりよっの敵は僕が

気合い満々の拓也だった

健汰は三回戦までいった

そして拓也は

また一回戦でストレートで負けていた

拓也はまた泣いていた

拓也「なんで僕だけ勝てな

いんだよ」

ずっと泣いていた拓也だったが桜をみてたらなぜか落ち着いた

そして気づいたときには泣き止んでいた

拓也「どうしたらさくら
るんだろう」

ちゃんみたいになれ

拓也「さくらちゃんにあっ
のって何だろう？
とりあえずさくらち

てぼくに足りないも
分らない？ でも
やんに追い付く」

そう心に誓った拓也だった

果たしてそれは実現する
のか？

第五話（後書き）

先日、友達にいろいろと指摘されました

小説を書くのが初めてよくわからないので

アドバイスを頂けたら幸いです

第六話

第6話 立教支部

普段は練習が休みの火曜日なのに
なぜか

拓也、準、大器、健汰、良は空手着を着ていた？

それも

大器&健汰はわくわくしている様子である

これは拓也達が小学校に上がる少し前の話である

大器&健汰

「先生いつも同じ場所で

練習するの飽きた」

神宮「そうかもな

うゝん??????

あ?そつだ???

大器&健汰

「なになに?(わくわく)」

神宮「先生が教えている

立教支部というところか?

があるいつてみない

大器「りつきょうしぶ?」

健汰「変な名前」

神宮「みんななかなか強い

んだけどな」

大器&健汰

「ピク? 行く」

神宮「他のみんなはどうす

る？」

良「ぼくも行きます」

準「ぼくも行こうかな」

綾「私は遠慮します」

神無「わたしも」

神宮「拓也はどうする？」

大器「たあゝくんも行こう

ぜ？」

健汰「そっだよ」

良「頑張ろうよ」

準「たぐやくんもいこうよ」

「？」

拓也「うん」

神宮「決まりだな？じゃあ幼稚園に集合」

来週の火曜日に立教

全員「はい」

そして現在にいたる

今、みんなは立教幼稚園の門の前に立っている

立教幼稚園ではたくさんの門下生が練習していた

大器&健汰

「でかい？」

拓也&準&良

「緊張するよ」

驚くのも無理はない

拓也達の草津支部は二階の一部屋だけでやっているのに対して

立教支部は立教幼稚園の

外全体を使ってやっているのだ

大きな滑り台にブランコ

たくさん遊び道具に

こどもたちはうれしそうで空手のことを忘れていた

すると後ろから

神宮「よく来たな 入れよ

」

そして

神宮と草津支部のみんなが入ると

「こんにちは」

という大きな声で挨拶していた

草津支部のみんなはなんか萎縮していて

まあ無理もないが

神宮「おーい慶太ちよつと

来てくれ」

慶太「はい」

神宮「この子達の面倒を

みてくれ」

慶太「はい」

慶太「ぼくの名前は

仲村 慶太

ら けいた

みんなの名前は？」

よろしくね

（なかむ

大器&健汰

「大器と健汰だよ
よろしくね」

拓也&準&良

「拓也、準、良です
よろしくお願いします」

慶太「みんな元気だね」

神宮は慶太達が話している間に話を進めていた

神宮「みんなこの子達は

先生が教えている

く た子達だ

今日はこの子達と

試合をするからな」

草津支部から来て

和人&雅弘

「強いんですか？」

神宮「戦ってみれば分かる

今から呼ばれたもの

は残ってくれ

後のものはすまない

が見学してくれ」

そして選ばれた五人以外の人達は隅にいった

雅弘と和人は当然選ばれていた

そして

草津支部VS立教支部の
戦いが始まる

?注 相手はみんな幼稚園児です

第六話（後書き）

こんにちは

最近更新が送れてすみません???

受験まで後5日しかないんで

なかなか更新ができません

受験が終わったらまた頑張るのでよろしく願いします？

第七話（前書き）

入試終わりました？

第七話

第七話 移籍

神宮「それではこれより

草津支部対立教支部

の試合を始める

審判は先生がやるか

らな

お互い礼」

全員「お願いします」

神宮「慶太、草津支部の順

番はお前が決めてく

れ試合は団体戦形式でやるからな」

慶太「分かりました」

「みんなどうでしょうか？
かな？」

「この中で一番上手い子は
だれ

全員「良くんです」

慶太「じゃあ最後は良君で

いこう」

良「分かりました」

慶太「じゃあ

一番目、健汰君

二番目、大器君

三番目、準君

四番

目、拓也君

五番目、良君

これで行こう」

全員「はい」

大器&健汰

「団体戦って何？」

健汰「団体戦っていうのは
って先に三勝した方

ね一チーム五人で戦
の勝ちだよ」

全員「なるほど」

拓也&準

「じゃあけんちゃんみたい

ちゃんと良君で三勝だね

」

大器&健汰

「任せといて」

良「僕が勝てるか分からない

いよ」

慶太「拓也君、準君そんな

上手くなれないよ

気持ちでのぞむなら

自分が勝つつもりで

やらなきゃ

そんないい加減な

今すぐ帰れ

人に頼ってたって

だめだ」

拓也&準「はい

」ごめんなさい」

慶太「分かればいいんだよ

」頑張ろうな」

そう言って拓也と準の頭をなでた

神宮「決まっただみたいだな

」それじゃあ始めるぞ

」型は拳雷の型」

注？拳雷の型とは基本中の基本で試合でも一二回戦で主に使われる

神宮「先鋒前へ」

草津支部の全員

」先鋒って何？」

慶太「試合の順番のことだ

よちなみに

一番目を先鋒

二番目を次鋒

三番目を中堅

四番目を副将

五番目を大将って

いうんだよ」

全員「へえー」

準「大将ってなんかかつこ

いい」

慶太「大将は一番上手い子

がやるんだ」

拓也「だから良君が大将な

んだ」

神宮「先鋒はやくしろ」

健汰「勝ってくる」

全員「頑張つて」

神宮「始め」

健汰は負けた

神宮「次鋒前へ」

大器「僕は負けないぞ」

しかし

大器も負けた

神宮「次、中堅」

準も負けてしまった

これで三勝で立教支部の勝ちが決まった

神宮「次、副将

拓也はやくしろ」

拓也は自分が負けると思っていた。それもそのはず 草津支部で勝ったことがないのは拓也だけだったから誰がみてもわかるくらい拓也の目はしんでいた
そんな時

「ばちーん」

鈍いおとがなった

慶太が拓也を殴っていた

慶太「前にも言ったはずだ
ら帰れ」

いい加減な気持ちな

拓也「ひつく？」

慶太「悔しくないのか皆が
わない

負けて

オレがかたきをとっ
のか」

てやろうと思

拓也「悔しい」

慶太「だったらぶつけて

こい」

拓也「はい」

和人「早くしてよ」

拓也の相手は和人だった

神宮「始め」

拓也「絶対勝つ??」

神宮「こんな拓也初めてみ

すごい気迫だ

慶太のやつ拓也の力

るな

を引き出したな」

慶太「最初に見たときに

眠っているような

みたけど

もしかしたら力が

きがして副将にして

ここまで

とはな

今の和人じゃあ勝て

ない」

神宮「拓也の勝ち」

草津支部のみんな

「やった??」

立教支部のみんなはすでに三勝しているので
今の試合を見ていたのはほんの少しだった

拓也「初めて勝った」

慶太「やればできるじゃん

なよ」

その気持ちを忘れる

拓也「はい」

拓也は初勝利を草津支部のみんななで喜んでいた

慶太「こいつは化けるかも

しれないな」

神宮「次、大将」

次は良対雅弘だった

雅弘もかなりの実力者

だが、良はその上を行く誰から見ても実力差は明らかだった

神宮「良の勝ち」

草津支部のみんな

「さすが良君」

立教支部のみんな

「あいつすげーよ」

雅弘に勝ったぞ」

そして合同練習に入った

神宮「今日はここまで」

全員「ありがとうございます」

した」

神宮「草津支部のみんな

」

今日はとうだった？

大器&健汰

「先生僕もつと頑張るよ」

準「僕も」

拓也「僕も？」

神宮は皆がさらにやる気になってくれて満足そうだ

神宮「良どうしたさつきか

ら黙ったまんまで」

良「先生、僕は立教支部に

移りたいです」

全員「えー？？？？？」

良「ここにはたくさん

先輩達がいるし練習

時間も多

僕はもっと強くなり

たい」

神宮「良、わかった他には

いないか？」

大器「僕は草津支部が好き

だし、草津支部で勝

ちたいからパス」

健汰「僕も草津がいい」

準「良君がいなくなるのは 寂しいけど僕も草津に残る」

拓也「先生、僕も立教支部に移りたいです」

（みんなと離れるのは辛いけど幼稚園や試合で会えるしそれに僕も強い）

く な り たい

ここで練習すれば さくらちゃんに

追いつけるかも

神宮「分かった じゃあ来週から

ここ にかい」

拓也 & 良
「はい」

こうして拓也達は立教支部に移籍した

第七話（後書き）

なんかスポコンになりすぎてるような？

次は恋愛要素を入れていきたいと思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2389y/>

ライバル OR

2011年11月18日05時50分発行